

三郷地域の成り立ち ～時代を築いた人びとと文化～

平成 23 年 11 月 17 日(木) 午後 7 時～8 時 30 分

三郷公民館 講義室

I どんな人物を取り上げるか ～人物選択の基準～

歴史上の人物、偉人、社会的功労者等々、人物をどう取り上げるか、人物選択の基準は、様々である。そして、それは、時代や社会的な風潮によっても大きく左右されると考えられる。

『三郷村誌 I』では、人物編として 31 人をあげている。どのようにしてそれらの人物を選んだか知りたいところだが、記載されていない。しかし、残されていた原稿などから相当な検討を重ねつつ選んだことがうかがえる。

『南安曇郡誌第三巻下』では、「郡内各町村の地方委員が各町村から略歴によって提出し(三五〇余名)、これをもとにして人物選考委員会が(略)登載人物一一八名を選択」したとあり、さらに「人物選考委員は前後九名で二〇年の長きにわたって選考が行われてきた」(あとがき)と記されている。多くの人と時間をかけて人物を選択した経緯がわかる。

さらに人物選択の観点については「当時の社会情勢価値観が基盤となって、どのようなことが考えられ、なされたかが本質的な観点であり、人物の各類別にわたって、その優秀性・著名度・影響度が考えられる。また、たとえ事業に失敗はしていても、その心情着眼識見が後人を啓発するところの大きいもの等も、人物として衆目の斉しく認められるものである。なお、その人物と現代とのつながりも考慮された。」(第九編人物誌 総説 傍線は筆者)と記されている。

これらのことを参考にしてみるとおおよそ次のようなことに着眼してみることがいいのではないか。

- 1 その時代の中でその人物が成した事業や業績が顕著で優れている。
- 2 その事業や業績が、人々によく知られ認められている。
- 3 現代でもその業績や事業が生かされ、影響やつながりをもっている。

II 『三郷村誌 I・II』に取り上げられている人物

先に記したように『三郷村誌 I』では、31 人をとりあげている。これに務台理作・松岡弘・植原悦二郎・白木正博を付け加え、まとめて一覧表にしたものが、後ろの<資料>である。

この<資料>の記載の順序は、『三郷村誌 I』にしたがっている。項目として取り上げている生年・没年・出身ならびに「自治功労者」「国学者」等々の分類は、すべて『三郷村誌 I』による。

「功績・歩み・人柄等の要点」の記述は、『三郷村誌 I』『南安曇郡誌・第三巻下』を参考に主な部分を要約したものである。

表の右の欄に○印のある人物は、『南安曇郡誌・第三巻下』に取り上げられている人物である。まとめ方等で不十分な所があると思われるが、ご指摘いただき今後訂正していきたい。

これらの中から三郷関係の次の 10 人の人物を選んで詳しく記述していきたい。

多田加助 播隆 中田又重 務台伴語 百瀬亥三松 白沢保美 降幡数太郎 岡村千馬太
務台理作 植原悦二郎

* 安曇市ホームページ・『三郷村誌 I・II』『南安曇郡誌・第三巻下』その他関係資料を参照してまとめた。

多田 加助

貞享3年(1686) 貞享(加助)騒動を指揮した人物

<経歴>



(三郷村誌 I より)

寛永 16 年(1639) 中萱村に生まれ、幼名を三蔵といった。26 歳のとき襲名して加助と改め庄屋役を引き継いだ。加助は温厚で愛郷の念が強く、公益のためにつくした。また学を好み農に励んだ。加助の家に前領主松平出羽守直政の家臣丸山文左衛門が賓客としていた。文左衛門は、陽明学を修め言行一致を説いた。加助はこの師について学び武芸もおさめた。

貞享(加助)騒動の経緯

貞享 3 年(1686)この年は、前年に引き続き不作の上、疫病が流行し、餓死するものが道に横たわるほどであった。それにもかかわらず年貢の増徴命令でいままで粃一俵が二斗五升であったものを三斗五升にするというものであった。

この増徴命令に立ち上がったのが、加助を中心とする庄屋たちであった。

10 月 10 日、安筑の同志を中萱の熊野権現(熊野神社)に招いて相談し五か条の要求項目に 12 名が署名した。

10 月 13 日郡奉行小嶋五郎兵衛に直訴する。奉行は越訴だとし受け取らない。加助たちは再三受理をせまる。このことが村から村へ伝わる。

10 月 14 日未明、蓑傘に鋤鍬を持った農民が松本城下に集まる。その数 4,000 人とも 10,000 人ともいわれている。

10 月 18 日家老連名の回答書を受け取る。全面的に加助たちの要求を認めるものであり加助たちは村へ帰る。

10 月 19 日夜~20 日未明、回答書は、加助たちを退散させる手段であって、藩では強訴であるとして加助を含む首謀者、家族を捕らえ、回答書は強引に回収する。

翌 11 月 22 日安曇の者は勢高で筑摩の者は出川で、加助以下 8 人が磔刑に家族等 20 人は獄門の刑に処せられる。

五箇条の要求項目

- 1 のぎ取りはやめてほしい
- 2 粃 1 俵 2 斗 5 升摺りにしてほしい
- 3 大豆の値があがったので大豆値でなく粃値にしてほしい
- 4 領外への輸送米の百姓負担はやめてほしい
- 5 藩の雑役に出る給金は藩の負担にしてほしい



(二斗五升の碑)

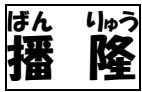


(顕彰慰霊の碑)

<関連事項>

・貞享義民記念館・貞享義民社(加助神社) 及び加助宅跡(長野県指定史跡)、加助の墓・貞享義民顕彰慰霊の碑・熊野神社の逆さ杉・首塚などいずれも中萱区内にある。

・騒動五十年忌の供養塔 平成 20 年三郷村誌編纂の過程で発見される。楡区の共同墓地にある。



槍ヶ岳に「善の綱」をかけ苦勞のすえ開山した修行僧



<経歴>

天明 6 年 (1786) 現在の富山県上新川郡犬山町で生まれる。

文政 11 年(1814)29 歳、江戸本所靈山寺で浄土宗の正式な僧となる。**笠ヶ岳の再興**を願い文政 6 年(1823)38 歳、登頂、翌文政 7 年には一里塚を設置、頂上へ阿弥陀仏を安置する。笠ヶ岳から**霊峰槍ヶ岳を遠望**し、万人の修業の場にするため**開山する意**を固めていった。

文政 9 年(1826)41 歳、松本の玄向寺を訪ねたのち小倉村を訪ね**中田又重**(播隆より 11 歳若い)

(松本市立博物館「播隆展」より)の案内で**槍ヶ岳の偵察登山**をした。これが 1 回目の登山である。この時、岩屋を発見し以後の登頂ルート探索の基地とした。これは、後年「坊主の岩小屋」といわれ現存している。

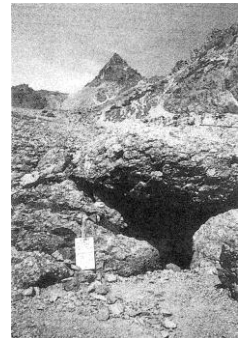
2 回目は、文政 11 年 7 月である。十畳にも満たない山頂に小さな岩の**祠**を築き三体の仏像を安置した。**槍ヶ岳開山**である。又重ほか 3 人が同行。同年 8 月、穂高岳に六字名号碑を建てる。

それから 5 年後、3 回目、天保 4 年 (1833)8 月、又重と内弟子 5 人で集団山行する。登頂後「坊主の岩小屋」に一人残り念仏を唱えていたが衰弱して又重に救い出される。

4 回目、天保 5 年(1834)6 月、播隆の信者や又重の獵師仲間など大勢で登山、槍ヶ岳の肩と穂先にわらの綱を設置、**回向柱**と本尊を結ぶ綱に因み「**善の綱**」と名づける。

5 回目、天保 6 年(1835)6 月、50 歳、「善の綱」を鉄鎖にし末長く誰にでも開かれた山にしたいと願う。10 月鍋冠山へ冬籠り用小屋がけ、大雪で失敗、足の指 2 本失う。上長尾村阿弥陀堂で越冬する。

天保 11 年(1840)8 月、信者らによって**鉄鎖がかけられ大願成就**する。播隆は病気のため登山を断念する。同年 9 月 15 日野沢村庄屋宅へ泊まり、翌日近在へいとまごいをし美濃へ出立する。10 月 21 日、美濃太田にて遷化する。



(坊主の岩小屋)

<播隆に関わる旧跡>

・大日堂 南小倉。播隆上人槍ヶ岳開山の起点。六字名号碑がある。

・弘徳院 野沢。播隆上人説法の堂。

・阿弥陀堂跡 上長尾。足の指治療のため天保 6 年 10 月 23 日から翌年 7 月 23 日まで滞在。

・上長尾村中建立の六字名号碑 平福寺仁王門横にあり。



(阿弥陀堂跡・上長尾)



(六字名号碑・平福寺)

飛州新道を開通させ、播隆の槍ヶ岳開山のための道案内をし 成功させた功労者



(三郷村誌 I より)

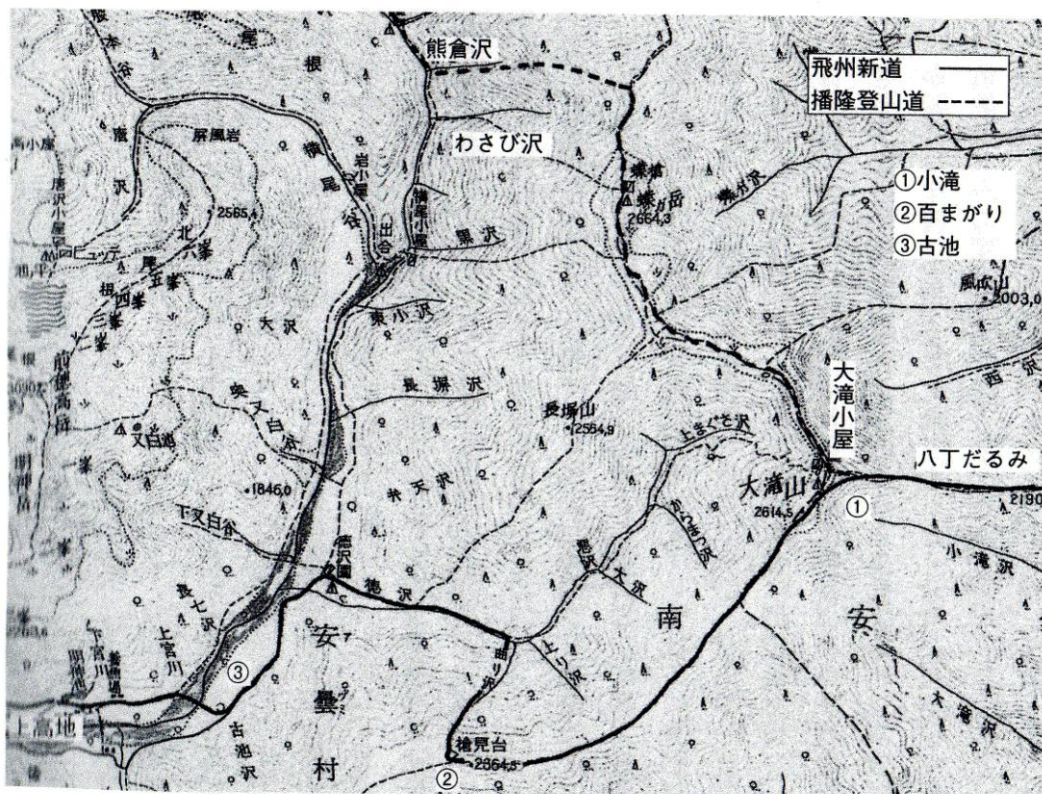
*又重は従来、男性名「郎」付けの風習により又十郎と紹介されてきているが位牌は又重である。又十・又十郎・亦重郎などとも記されている。(『三郷村誌 II』)

<経歴>

寛政 7 年 (1795)南小倉に生まれ、幼少の時父を失い母の手で育てられた。体格もよく学問も好きで二十五、六歳のころには村の青年に漢字や習字を教えていた。

その頃岩岡村の庄屋二代目伴次郎(英総)は飛騨へ新道をつくろうと努力していた。この新道開削の実務担当者となった又重は、自ら陣頭にたって岩を砕き敷を切り開いて工事をすすめた。文政 3 年 (1820)10 月開削着工、天保 6 年(1835)8 月全通、16 年目に飛州新道が完成する。

文政 9 年 (1826) 8 月、播隆から槍ヶ岳開山の念願を聞いて槍ヶ岳登山の案内を一切引き受ける。1 回目は、偵察登山であった。以後、この登山を含め 5 回播隆を案内している。(播隆の項参照)なかでも 2 回目の天保 4 年 (1833)8 月、一人で残り、衰弱した播隆を助けたり、5 回目の天保 6 年(1835)10 月 3 日、冬籠りに失敗した播隆を収容したりしている。又重の功績は「播隆の片腕となって働き、播隆が槍ヶ岳開山の念願を成し遂げ得たのは全く又重の力によるものであった。」(『三郷村誌 I』)



飛州新道と播隆槍ヶ岳登山道 (南安曇郡図による)



(飛州新道の起
点・大日堂)

若い時から学問を好み、近郷ではごく早い時期に寺子屋を開塾、 多くの子弟の教育に貢献した寺子屋師匠



(三郷村誌 I より)

<経歴>

文化 11 年(1814)生まれ、通称伴右衛門、明治初年に伴語と改める。幼少のころから学問を好み、陽明学を熊本出身の横井指南に、書を江戸の人関其寧に学ぶ。そのほか謡曲・俳句・生花なども学び、いずれもその道の奥義をきわめた。国学は本居学派に属し、中村英碩・松岡平臣らと学ぶ。俳句は特に堪能で天保年間、善光寺奉額百句選句の巻頭句「蟬なくや白になる木ときねの木と」を残している。

地方文化の先駆者として天保 3 年(1832)から明治元年(1868)まで 41 年間寺子屋「温知堂」を開き 1,000 人余りの子弟を教育した。一人の師匠で開塾していた年数としては、三郷地域では中萱村の岩本塾の 44 年間に続いての長さである。

教授科目は、読書・習字・算術・礼法・插花・俳諧などで生徒は遠く松本・豊科からも来塾していた。明治 6 年 (1873) 学制改革により野沢学校となる。

<務台伴語に関わる遺跡>

・彰徳碑 野沢



(温知堂の雰囲気を残し立て替えられた務台宅・野沢)



(頌徳碑上が旧・下が新)



(西国四国秩父巡礼供養塔)

信濃鉄道(現大系線)松本・大町間の開通に奮闘し実現させた 功労者

<経歴>



(三郷村誌 I より)

文久3年(1863)一日市場に生まれる。明治10年(1877)松本開智学校・一日市場明志学校に通う。翌明治11年穂高小学校を卒業、以後数年間同校で教える。

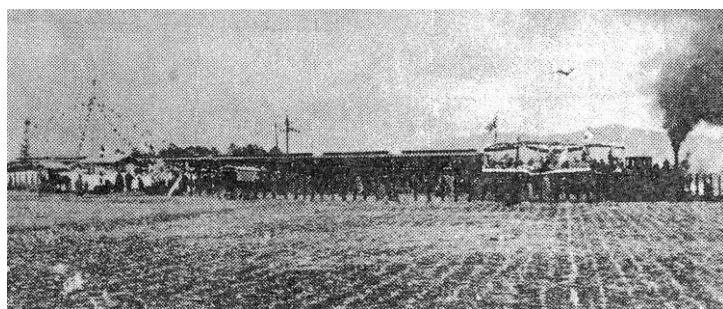
明治32年(1899)明盛村長となり続いて36年長野県会議員となる。その間、梓銀行頭取、安曇電気株式会社の取締役にも就任する。

明治43年(1910)松本・大町間に鉄道敷設の議が起こり、国庫補助金を得て起工する計画を立てる。これに対して馬車業者や北安の有力者の反対運動がある。百瀬は東奔西走して説得に努め、降旗元太郎代議士、小里頼永松本市長等の応援賛同も得て同年12月に申

請書を提出、松本商工会の猛烈な競願もあったが、翌年4月敷設が許

可される。そこで、自ら発起人となり、創立総会を開催、株式募集・用地買収などの難事業に挺身した。大正2年(1913)4月起工し、同4年1月松本・豊科間が開通、翌5年大町まで開通、松本・大町間35kmの全通に成功した。

また、祖父の後を継いで中房温泉の経営に尽力する傍ら、広く日本アルプスの風光明媚なことを世に紹介するとともに登山道の改修や山小屋施設の増設改良にもつとめた。



信濃鉄道 松本～豊科間は、大正4年1月5日開通、6日開通式、開通式当日の一日市場駅。右側に黒煙を上げている機関車が見える。(『三郷村誌』Iより)

百瀬亥三松のことが報じられている記事

(平成23年11月5日市民タイムス)

近代に壮大な山小屋構想

北アルプス・燕岳の山口にある旅館・中房温泉の経営者が正期に昭和初期、燕岳周辺から穂高連峰にかけて15カ所の山小屋を建設する計画を練っていたことが、信州大学工学部建築学科の調査で分かった。登山客が安曇野から入山し、山小屋に降りながら穂高連峰を周遊して上高地に至る、山前では大規模な構想で、登山コースに点する山小屋の建設を目指していた。現存する登山道に登山コースを点する山小屋の建設を目指していた。現存する登山道に登山コースを点する山小屋の建設を目指していた。

燕岳周辺・穂高連峰 15カ所

建築学科の土木史教授と梅子野史助教授が中房温泉の歴史を調査する中で、大正10(1925)年から昭和1(1926)年にかけ、15カ所の山小屋を建設する計画を練っていたことが、信州大学工学部建築学科の調査で分かった。登山客が安曇野から入山し、山小屋に降りながら穂高連峰を周遊して上高地に至る、山前では大規模な構想で、登山コースに点する山小屋の建設を目指していた。現存する登山道に登山コースを点する山小屋の建設を目指していた。

中房温泉が所蔵する古文書、山小屋の「経緯備地貸し付け願」とみられ、大正12年ごろの資料という(信大工学部建築学科提供)

信大調査で文書発見 登山史上「画期的」

信濃鉄道(現JR大系線)の創設者でもあった中房温泉6代目の百瀬亥三松(1863～1923)は、明治42年刊行の『山岳』に論文を寄せ、鉄道で都市と結ばれた日本アルプス山系の巡回路を開くという志を記した。

森林植物学の研究・調査のために外国へ出かけ、その成果を国内の林業発展のために尽くした功労者

<経歴>

明治元年(1868)生まれ、明治 20 年 (1887) 東京高等農林学校入学、同 27 年学制改革により東京帝国大学と合併され林学科を卒業する。明治 30 年 (1897) 農商務省技師となり同 33 年万国博覧会の委員として、また森林植物学研究のためフランス・ドイツ・スイスへ留学する。明治 36 年(1903)林学博士の学位を取得する。

林学を科学的に研究するには、実験場が必要と東京目黒区に 5 万坪の試験場を開設、明治 41 年国立林業試験場初代所長に就任する。この農場では、林業を科学的に研究すると共に東京都の街路樹の改良、公園づくりや多摩墓地の建設を指導した。

昭和 7 年 (1932) 退官、その後日本林学会々長・興林会理事長・日本農学会々長として林学の発展のために尽力した。

三郷総合支所駐車場東に大きく茂るヒマラヤ杉とユリノキは、明治 41 年 (1908) 博士が国立林業試験場時代、温明学校の開校を記念してヒマラヤ杉はインドからユリノキは北米大陸から苗木を持ってきて植えたものである。これらの木はこの種類では、日本で樹齢の最も古いものといわれている。旧三郷村の文化記念村木で、現在は安曇野市天然記念物に指定されている。

ユリノキの根元には博士の愛唱の詩の歌碑がすえられている。「心に太陽をもて 照る日曇る日 そりや天候だ 嵐が吹こうと 雪が降ろうと いつも 心に太陽をもて」(碑文は縦書き) この詩は、博士がドイツ留学中、南ドイツ生まれの詩人フエーザル・フライシユレンの詩を訳したもので、心の灯として励んだといわれている。



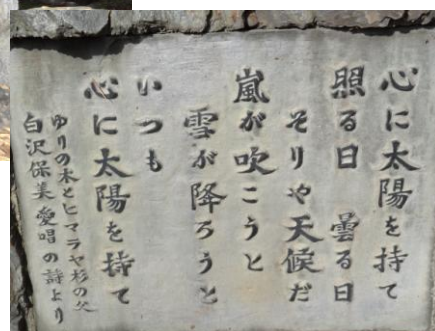
(三郷村誌 I より)



(ヒマラヤ杉と葉を落としたユリノキ)



(博士愛唱の詩碑)



ふりはた 降幡 かず た ろ う 数太郎

小倉官林開墾推進を中心となって進め、簡易水道設置、黒沢川架橋などの成果もあげた小倉村長

<経歴>



(三郷村誌 I より)

明治 2 年 (1869) 南小倉に生まれる。明治 22 年 (1889) 小倉村役場書記、同 43 年(1910)4 月～7 月助役、同 44 年 10 月郡会議員に当選、2 期 8 年つとめる。

大正 8 年 (1919)黒沢電気会社を創設、小倉に電気を供給し電灯がつく。同年小倉村長に就任する。折から「小倉官林払い下げ」の運動が周辺の 6 か村も含め盛んになり大正 8 年 11 月払い下げが許可される。直ちに「小倉村外 6 か村開墾組合」の設立に奔走し、翌 9 年 3 月開墾事業に着手、官林約 562 町歩(562ha)の開墾の管理者となって全責任をもって指揮 12 年の年月をかけ昭和 6 年 (1931) 491 町歩の

開墾を終え完了する。移住者は 170 戸であった。

大正 11 年 (1922) 小倉開墾地に簡易水道設置、全戸給水する。昭和 3 年(1928)黒沢川に 2 か所架橋工事を竣工させる。また、小学校校舎の統合、教員住宅・役場庁舎の改築、小倉地区の郵便局の開局など村政に大きく貢献する。

大正後期から昭和初期の農村経済恐慌のなか、大旱魃、凍霜害に見舞われ、作物は減収となり開墾組合の財政は極度に窮迫、小作料の滞納もあり、この打開策に血のにじむような苦心がはらわれた。降幡は、穏健寛容で明朗、私事を犠牲にして事にあたった。昭和 16 年(1941)亡くなった際、村長をやめていたのにもかかわらず村民は準村葬をもって弔ったという。



(降幡数太郎翁頌徳碑・南小倉)



(上・農林省から借り入れたトラクターによる開墾 下・手による開墾)



(開墾地の堰と簡易水道一白く見えるもの)

教師のあるべき姿として師道の確立を提唱し気魄に満ちた 教育を実践し、教育界に大きな影響力を残した教育者

<経歴>



(三郷村誌 I より)

明治 8 年(1875)生まれ、父は馬を農耕の大事な資力として大切にしていたので息子に馬の字を入れて命名したという。

一日市学校、豊科学学校から当時、一郡に一の南安曇高等小学校を明治 23 年(1890)16 歳で卒業する。開校以来の優れた成績であったという。二級下に同じ中萱出身の植原悦二郎がいた。

明治 26 年 19 歳で長野師範学校に入学、担任は高等師範出身の小平小平治で小平は岡村の遠大な志に感じ「知時務持大節即師道立矣」(時務を知り大節を持すれば即ち師道立つ)の章句を書いて贈り励ました。これを後に犬養木堂に墨書してもらって座右の銘とした。

この軸は、岡村没後夫人によって南安曇教育会に寄贈され総会、岡村忌などに掲げられている。

明治 30 年(1897)師範学校卒業、東穂高小学校に赴任、ここで井口喜源治と出会い東穂高禁酒会夜学会の講師をつとめる。翌 31 年梓小学校へ転勤、軍国主義的に形式化した教育の姿に失意をかくしきれず池田小学校の島木俊彦(赤彦)、山辺小学校の太田貞一(水穂)をたずね鬱憤をはらしたという。

その後、県内各地を校長として歴任し、明治 44 年(1911)37 歳で山形小学校長になる。この時期は「蓄積された実力と気魄に満ちた教育実践を行っていたいわば最も円熟した時期であった。特に同志と図って、東西南北会の主唱者となり天下の名士を招いて講演会を開き、教育者のあり方を談じた。松本・東筑・安曇地方を中心に教育界の流れは、人格主義の台頭と師道の確立が叫ばれた時代であった。」(『南安曇教育会百年誌』)



後に信濃教育会長・日本連合教育会長を長年務めた松岡弘は、この頃に岡村を訪ねた時のことを次のように書いている。「私が明治 45 年 3 月、師範学校を卒業して三郷村の小学校へ赴任した時、校長と職員が対立して問題が起きた。日ごろ尊敬している大先輩で山形小学校長であった岡村千馬太先生の教を乞いに行った。その晩、先生の仮寓にご厄介になったがたまたま先生書斎兼客間の床に、犬養木堂の書いた「知時務持大節即師道立矣」がかけられてあった。問題をもっていたためもあってか、この語が心底深く強く刻みこまれた。それが今日まで事あるごとに脳裏に浮かび出て、教え励まされる大事な要素の一つであった。」(松岡弘『師道』)

大正 9 年(1920)諏訪・小県の郡視学を歴任し長野県視学となる。この時たまたま「気分教育」と称された問題が起こり、「東西南北会」は、教育を惑乱する集団で岡村はその首謀者であるとして埴科郡長に任命されたが固辞した。

大正 12 年梓小学校に迎えられ、南安曇教育会の教職員による初代会長となった。(それまでは郡長がつとめていた)昭和 4 年(1929)職を辞し東京都北多摩郡千歳村(当時の地名)に移り住む。

南安曇教育会では、命日の 6 月 15 日前後に「岡村忌」を設け、松本の城山で「岡村千馬太忌碑前祭」をし、その後、教育会館で現在の教育のあり方等を考える催しを毎年行っている。

西田哲学の一翼を担い戦後日本の思想界で指導的役割果たした哲学者



(晩年の務台理作・写真集より)

<経歴>「赤つち道」(三郷村教育委員会刊・平成8年)による

小倉官林の大自然に抱かれて

明治23年(1890)生まれ、6歳の春長尾尋常小学校へ入学。上野原に広がる赤松林の小倉官林「お林」を遊び場とし、お林のことなら何でも知っている「お林の子理作さ」として育つ。

「巖頭の感」に感動、哲学的関心を

明治36年(1903)12歳、日光華嚴の滝へ投身自殺した藤村操の辞世の辞「巖頭の感」を暗記してしまうほど読み感動する。この頃から哲学的関心をもつ。百姓仕事にも一方ならぬ精を出して働く。

明治39年、杏(梓川)の農業補習科から松本郁分学校へ進み1年で卒業する。農業補習科では小学校からの同年の松岡弘(下長尾)と

一緒に通う。卒業後、明治40年(1907)～42年和田、温明、松本源池の各小学校で教員生活をし、専門学校受験のために猛勉強をする。

「善の研究」で開眼、西田門下生に

明治43年(1910)東京高等師範学校入学、夢にまで見た上京がかないその幸せをしみじみと感じる。また、その春早逝した同郷の十歳年上の彫刻家、荻原碌山の遺作展を見て感動する。寮で同室の土田杏村に西田幾多郎の「善の研究」を読むことを勧められ哲学へ心を向ける。土田は後に有名な評論家となる。

大正3年(1914)卒業と同時に長野師範学校へ赴任する。ここで後に温明小学校校長になる菅沼知至と出会う。菅沼は「哲学を学ぶなら京都の西田門下へ」と熱心に京都大学進学を勧め、さらに温明小学校教員時代の同僚鳥羽佐一が学費援助を申し出る。

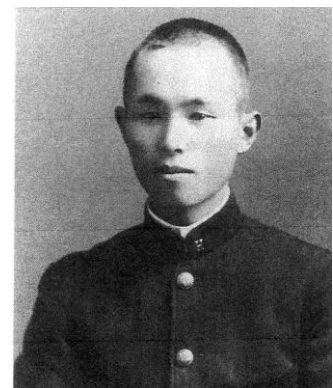
大正4年(1915)長野師範学校を退職、京都大学哲学科へ入学、西田幾多郎に師事する。大正7年同科を主席で卒業し大学院に進学する。

西田哲学の一翼担う哲学者に

大正11年(1922)32歳、第三高等学校・同志社女学校専門部・大谷大学文学部哲学科で哲学を教えることになり務台理作先生と呼ばれるようになる。

大正15年ドイツ、フランスに留学、余暇を利用してヨーロッパのほとんど全土も探訪する。帰国後の昭和3年(1928)38歳、当時日本の領土だった台湾の新設早々の台北帝国大学へ赴任、「ヘーゲルの哲学」について研究を深める。この研究が認められ昭和10年(1935)44歳、「文学博士」の学位を取得、東京文理科大学教授に就任する。

この時、故郷の温明小学校校長になっていたのが西田門下生になることを勧めた菅沼知至で、務台のために学位授与祝賀会を開催した。そのお礼に「温明少年の歌」を学校へ贈り、これが旧「温明小学校校歌」として歌いつがれた。



東京高等師範学校時代(20歳ころ)

その後、『社会存在論』『場所の論理学』などの著書を発刊し独自の考えを発表、恩師西田幾多郎から「君のものの務台哲学ともいうべきもの」と激賞された。

信州の各地へ哲学の芽を

大正 9 年(1920)西田幾多郎を直接の指導者とする**信濃哲学会**発会に尽力、以後西田の招 聘^{しょうへい}や連絡、などの仲立ちをする。この会が解散した昭和 20 年(1945)までかわり続け、昭和 10 年(1935)以降は西田に代わり講義をする。各都市に生まれた哲学会の講師として年に何回も信州を訪れている。このことは、信州教育の精神的支柱の形成に深くかかわってきたといえる。

戦後の教育改革の推進

昭和 20 年(1945)終戦一か月前、東京文理科大学学長と東京高等師範学校長に就任、翌 21 年教育刷新委員会に所属、平和と民主主義をうたいあげている新憲法にかなう**教育基本法の**制定を強く主張する。また、大学設置委員として新制大学の設置について審査をする。

思想的転換、第三ヒューマニズムを提唱

昭和 25 年(1950)4 月、**生涯最大の転機**が起こる。ソ連抑留中、通訳をしていた教え子の菅季治^{かんすえはる}が『ソクラテスの弁明』をポケットに鉄路の露と消える。この自殺は、自分のヒューマニズムの無力さ弱さ以外に何ものでもない、菅の死は自分の責任だと自分を責める。今まで掲げてきた自分のヒューマニズムの無力さをしみじみと感じる。そして、いままで人々を抑圧してきたファシズムに対して戦えるヒューマニズムの保持者になろうと決意する。イタリア・ルネッサンスを原型とする教養的ヒューマニズム、近代市民社会を作り上げてきた市民的ヒューマニズムに対してファシズムと戦いうる「**第三ヒューマニズム**」を提唱する。こうして日常的に起こる社会問題に厳しい目をもって対応する。教員の政治活動禁止の教育二法反対、六〇年安保反対、高校全入制度実現、ベトナム反戦運動などに論陣をはる。

「赤つち道」への回帰

昭和 36 年(1961)71 歳、慶応大学教授を辞任、講師となる。74 歳で教壇を去る。「哲学は、現実生きる万人のもの」と言いますます盛んに多くの人が目にする雑誌や新聞を通して自分の考えを発表する。「哲学に老年というものはない、目が開かれたそこからいつも新しい歩みが始まる」「反省の考えの出るときいつも浮かんでくるのは、ふる里の例の赤つち道です」と述べている。「赤つち道」は務台哲学の出立点であり思索の道そのものであった。

「赤つち道」を登りつづける

昭和 43 年(1968)78 歳、郷里の三郷小学校で講演、「三郷ならではの村の歴史を知り、村の心を知って大地に根のはる花(人)の育成を」と自分の来し方を顧みるように語る。そして、自分の全著書をはじめとし、哲学・思想・宗教・歴史など三百余冊を温明小学校教員時代の同僚鳥羽佐一への謝恩の意味をふくめて「**鳥羽・務台文庫**」と名づけて寄贈する。この文庫はいまも後輩の先生方に活用されている。

<務台理作作詞の校歌>

温明小学校	倭小学校・中学校	穂高北小学校
三郷小学校・中学校	梓川中学校	
豊科中学校	西穂高小学校	



会田中学校での講演(昭和 36 年)

民主主義の顕現と議会政治の確立に心血を注ぎ、権力に屈せず節操を堅持した高潔な政治家



(広報「みさと」より)

<経歴>「植原悦二郎略伝」(倉科平著)による

明治 10 年(1877)生まれる。命名された名前は「鋭次郎」であった。戸籍係の書き間違いで「悦二郎」になってしまいそれが生涯の名前となってしまった。5 歳の時、祖父が百人一首を教えるとたちまち覚えてしまった。

明治 25 年南安曇小学校高等科を卒業する。在学中、連合試験・学期試験等優秀につき日本全国高等小学校読本を賞与される。

明治 28 年(1895)諏訪の龍上館という製糸工場で検番として働く。1 年ほどつとめたが満足せず、母の了解を得て横浜へ行く。

明治 31 年(1898)横浜で英語の勉強をしながら税関監吏補の試験を受け合格する。その間、留学の目的をもって渡米の準備をととのえる。叔父の米三郎はシアトル航路の航海士をしていたがその知人の世話で渡米できることになった。

明治 32 年 12 月シアトルに上陸、いろいろな仕事をスクールボーイとして働き、勉学にも励みブロードウェイ・ハイスクールの第一回生として卒業する。

明治 37 年(1904)ワシントン大学に入学、ジョン・アレン・スミス博士に政治経済をウィリアム・セーボリー博士に哲学を学ぶ。二人の影響を深く受け、民主主義に徹底した認識をもつようになった。在学中の明治 39 年、井口喜源治の研成義塾に学んだ青年たちがやってきた。その中で知り合いになり、のちのちまで親交のあったのは清沢 洌、東條 鱗(たかし)である。

ワシントン大学で4年間に修める全科目を3年で修得したのでアメリカ内地の視察の旅に出る。その旅の途中で日本人排斥の実情を知った。また、アメリカ南部の黒人問題に深い関心をもつようになった。奴隷解放の南北戦争からまだ 40 数年たったばかりでアメリカ南部の白人と黒人の関係には過酷なものがあつた。この実情を見ていっそうアメリカよりもイギリスに心惹かれた。

明治 40 年 9 月ロンドン大学に入学する。費用は古谷政次郎(山梨県出身)と太田丑太郎(梓村下角出身)が援助してくれた。研究生であつたので必ずしも規則正しく教室に出る必要はなかった。そのため暇をみては政治家の演説を聞きに行ったり、イギリスの国会を傍聴したりした。そして、議会運営のさまをつぶさに見聞して、日本でも国民を教育して、日本の議会も英国のようにあらねばならないという思いを深くした。

このように過ごすなか、3年間ひたすらに勉強して書き上げた学位請求論文を大学に提出した。審査の結果、ドクトル・オブ・エコノミックス・サイエンスの学位を授けられる。イギリスの法学博士である。この論文は最優秀論文としてメダルが授与された。法学博士の学位も得たのでイギリスの修学を終え帰朝することにしたが、その費用をつくるために博覧会事務局で働いた。

明治 43 年(1910)の暮れ 11 年ぶりに帰国する。

明治 45 年蔵前高等工業学校で英語を教える。明治大学の教壇に立つ。明治大学では、比較憲法と政治学、社会学であつた。比較憲法という講座は、当時どこの大学にもなく、欧米より帰国した新鋭の講義というので、東大や早大などからも学生が聴講にきて教室は、いつも満員であつた。

という。 教壇に立つかたわら文筆活動はますます盛んで論文を発表した。

(この部分『三郷村誌Ⅱ』より)

大正 6 年(1917)4 月 20 日の第 13 回選挙には、明治大学教授で 39 歳の植原悦二郎が立憲国民党から郡部で立候補した。国民党は明治 43 年(1910)に犬養毅^{いぬかいつよし}を党首として結成されたが、政友会、県政会の二大政党に比べ少数党であった。

植原に立候補を決意させたのは、国民党の党首犬養の「大学における青年の教育より、街頭に立って有権者を政治的に目覚めさせることのほうが議会政治建設の近道」(『県史』通史)であるという強い勧めがあったためである。

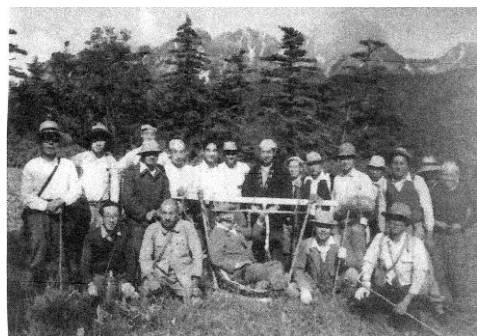
植原は、相生座劇場(豊科町)で犬養を迎え選挙演説会を開いた。このとき、「悦二郎は、明治大学教授の拝受帽をかぶりガウンを着てさっそうと演壇に立ち、新しいデモクラシーの政治を説いた。大正デモクラシーの新風が世間を風靡^{ふうび}しはじめていたときで、演説は青年を魅了せずにはおかなかった」(『植原悦治郎略伝』)という。選挙結果は、政友会候補 6 人が全員当選し、植原は 3,432 票を獲得し、9 人中 8 位で当選した。

植原の当選は、三郷村域の青年たちの絶対的な支持を受けた。神谷博(住吉)は、温村住吉青年会長で松本尋常高等小学校開智部(開智小学校)の教員であったが、熱心に選挙運動を行った。松岡定一^{さだいち}(下長尾)丸山円登^{えんと}(楡)など同郷の青年たちと温・明盛植原候補後援青年会を立ち上げ、選挙運動に熱中した。この青年同志会の組織は、大正 9 年(1920)4 月、南北安曇青年同志会に発展して、植原を当選させる原動力となった。

大正 8 年(1919)12 月の第 42 回帝国議会で普通選挙法の提案理由を植原は、初めて説明した。明治 23 年、最初の衆議院議員選挙が行われて以来、納税額によって選挙権が制限されていた。この財産制限を撤廃して国民一般に選挙権を与えようとする普通選挙運動が盛んになり帝国議会にも明治 35 年以来普通選挙法がたびたび上程されていた。この第 42 回帝国議会でも憲政会・国民党・新政会の野党が提出し、国民党を代表して演説をしたのである。植原は、世界情勢から説き起こしてとうとう 2 時間にわたって述べて注目された。しかし、この議会でも法案は否決される結果となった。

植原は、衆議院議員初当選以来 13 回当選し、在職年数 34 年 10 か月にわたった。その間、衆議院副議長、大臣(国务大臣・内務大臣)を 2 回、常任委員長(昭和 24 年予算委員長・30 年外務委員長)2 回就任などの功績を残した。

植原は、生涯を通して多くの著作を残している。主なものは、生前に 19、没後「八十路の憶出」「植原悦二郎と日本国憲法」である。なかでも「日本民権発達史」全四巻は膨大な著作であり、「植原悦二郎と日本国憲法」は吉野・上杉両博士との憲法論争をはじめ、主要な論文が編集されている。



(三郷スカイライン構想実現のために山駕籠に乘せられて視察)

郷土のためにも常に心を砕き現在の松本第一高校の創立にもかかわった。また、旧三郷村のためにも大きな立場から援助を惜しまなかった。

<資料> 『三郷村誌Ⅰ・Ⅱ』にとりあげられている人物

No	人物	生年		没年		出身	功績・歩み・人柄等の要点		関係する場所・参考事項等
1	多田 加助	寛永16	(1639)	貞享3	(1686)	中萱	義民	貞享3年(1686)貞享(加助)騒動の中心人物。 この年不作にもかかわらず藩は粃一俵三斗五升ずりの増徴を命じてきた。この軽減を他の庄屋たちと直訴し、農民は松本城下に押し寄せた。一時は、要求を聞き入れたかに見えたが関係者は捕らえられた。加助は、勢高の刑場で「五分ずり二斗五升」だと叫びながら松本城をにらんで刑場の露と消えた。	加助神社・貞享義民記念館・熊野神社 『南安曇郡誌』3巻下登載の有無 有りは○印以下同じ
2	飯沼 覚兵衛	享保10	(1725)	文化6	(1809)	二木	庄屋	再検地を請願し成功させた二木村の庄屋。 寛文2年(1662)降雪の中で検地が行われたが畦畔の区別がつかないため田畑を過大に評定されたため農民は重税に苦しめられた。これを見るにしのびず、再三にわたり再検地の請願を繰り返した。その甲斐あって再検地が実施され、石高にして150石2升7合が減らされ、農民から感謝された。	地藏堂 三柱神社 ○
3	竹内市郎兵衛昭長	延享元	(1744)	文政2	(1819)	中萱	庄屋	和漢の学問を修め、武術にも優れて組内の人々に慕われた大庄屋。 幼い時から学問を好み、大庄屋になってからは、学問を奨励し、自宅を寺子屋にして読み書き算盤を教えるなどした。常に農業の振興に努め、年貢が納まらないことのないようにした。大庄屋を辞そうとした時には、組内の人々に辞めないよう嘆願されるほどであった。	
4	播隆	天明6	(1786)	天保11	(1840)	(越中)	僧侶	槍ヶ岳に「善の綱」をかけ苦労を重ねて開山した僧侶。 文政9年(1826)松本玄向寺を訪れ槍ヶ岳開山の決意を話す。小倉の中田又重を案内人に頼み、又重やその弟子、狩人などと5回にわたり登頂を試みる。大病で播隆は参加できなかったが6回めの天保11年(1840)に念願の鉄鎖をとりつけることができた。この間、足の治療のため上長尾の阿弥陀堂へ逗留したり、安全に登るための「善の綱」をつくるために稲わらの調達に野沢村を訪れている。	平福寺 長尾阿弥陀堂跡 小倉大日堂 玄向寺 ○
5	中村 英碩	天明4	(1784)	文久3	(1863)	上長尾	医師	郷里で医業を開き貧しい人には無料で治療するなどし、国学にも造詣が深く茶道、音楽の道も究めた医師。 16歳の時、長崎へ赴き蘭学を学び医師を志した。京阪で医師の研鑽をつんだ後、郷里に帰り医業を開き、親切に施療したので村民はその徳をたたえた。また松本藩の藩医をつとめ領主の診察もした。国学を学び禅学、易学、茶道、歌道など幅広い道を究めた。	頌徳碑 ○
6	松岡 平臣	天明6	(1786)	嘉永2	(1849)	下長尾	国学者	国学を学び、のち歌道を極め多くの詠草と著書を残した国学者・歌人。 初め国学を学んでだが35歳の時、出郷し和歌山、松坂などで国学・歌道の修業をつんだ。帰郷後「春の舎社」をつくり歌道の研鑽をつむと共に各地から訪れる文人・墨客を家に泊めて歌道を楽しんだ。著書十四、五冊、詠草2万余首に及ぶという。	○

No	人物	生年		没年		出身	功績・歩み・人柄等の要点		関係する場所・参考事項等
7	中田 又重	寛政7	(1795)	嘉永5	(1852)	南小倉	道路開拓者	飛州新道を開通させ、播隆の槍ヶ岳開山のための案内をし成功させた功労者。 岩岡村の庄屋伴次郎の小倉から飛騨への新道建設の計画を引き継ぎ、自ら先頭にとって苦勞し16年の歳月をかけて難事業を完成させた。また播隆から槍ヶ岳開山の熱烈な念願を聞いて、登山の案内を引き受け、再三の苦勞の末、天保11年(1840)槍ヶ岳に鉄鎖をとりつけることができた。	南安曇郡誌・三郷村誌Ⅰでは「又重郎」となってるが三郷村誌Ⅱは「又重」としている
8	務台 伴語	文化11	(1814)	明治20	(1887)	野沢	寺子屋師匠	若い時から学問を好み、近郷ではごく早い時期に寺子屋を開塾、多くの子弟の教育をした寺子屋師匠。 国学のほか謡曲・俳句・生花なども学びその道をきわめた。俳句は特に堪能であった。天保3年(1832)寺子屋「温知堂」を開塾、41年間に1000人余を教育、子弟は遠く松本・豊科からも来塾したという。この塾は、のちの野沢学校となる。	頌徳碑
9	小松 鉄巖	天保4	(1833)	明治35	(1902)	(下高井) 一日市場	住職	一日市場の善導寺跡に真光寺を再興した住職。 当時の真光寺は、真々部にあったが安政2年(1855)火事で全焼、その後、廃仏毀釈で廃寺となった。明治15年(1882)49歳の時、善導寺跡に寺の再興をめざす鉄嶺和尚らに住職就任を懇請されて就任する。就任後は、建設資金の調達に奔走する一方、布教も熱心で席の暖まる暇もないくらい飛び回って尽力し再興を果たした。	真光寺
10	布山 瑞枝	天保9	(1838)	明治44	(1911)	北小倉	自治功労者	新しい村づくりに尽力した小倉村の初代村長。 小倉村は、科布村との合併、分離を繰り返し独立したのは、明治26年(1893)であった。それまで連合戸長・郡会議員などを務めていたが、この年村長に就任した。役場・小学校などの敷地を村に寄付したり、戸籍の整備、教育の充実、道路の改修、村有林の経営などを手がけ、新しい村づくりとその発展に尽力した。	
11	藤岡 甚三郎	天保10	(1839)	明治25	(1892)	中萱	蚕種改良家	春蚕中心の蚕種製造から夏・秋蚕種製造を容易にした蚕種改良家。 蚕種販売の折、武石峠で偶然に遭遇した事実から秋蚕が飼育できた。これをもとに、明治7年(1874)、秋蚕発生に適温を確かめ「究理法」を発案した。この「究理法」により夏・秋蚕種製造を確実かつ容易にし、その実用化の道をひらいた。	○
12	百瀬 謙三	弘化3	(1845)	大正5	(1916)	一日市場	自治功労者	梓橋経由の糸魚川街道建設に尽力した戸長。 明治20年(1887)松本から糸魚川までの新道を梓橋経由で建設する話が持ち上った。これに対し南安北部地域の住民が反対し、熊倉橋建設を求め反対した。また、新道予定地の土地所有者の反対運動もあった。このような反対を押し切って明治23年(1890)新道開設にこぎつけた。新道は、現在の国道147号にあたる。	
13	中沢 染江	嘉永元	(1848)	明治45	(1912)	下長尾	自治功労者	コレラ大流行の際には的確な対処で多くの人命を救ったり、学校設立に尽力するなど私事をなげうって村につくした村長。 明治6年(1873)長尾・一日市場辺にコレラ大流行、自宅を診療所、病院に開放、幾人もの人命を救う。明治5年(1872)新学制発布の際、村内に学校をつくろうと計画、平福寺に協和学校を設立させた。	

No	人物	生年		没年		出身	功績・歩み・人柄等の要点		関係する場所・参考事項等
14	百瀬 豊三郎	嘉永元	(1848)	明治45	(1912)	一日市場	自治功労者	明治末期の明盛村財政の健全化や学校統合に指導力を発揮した村長。明治26年(1893)村長に再選されると一般経費節約のために村費用2割5分の削減、続いて基本財産蓄積条例をつくり財政の健全化をめざした。また明治41年(1908)村内の小学校の統合の計画が下中萱区民の反対で挫折しようとしたが、適切な対応で解決した。	
15	多田 道弥	嘉永3	(1850)	明治43	(1910)	中萱	蚕種改良家	蚕種を保存する風穴の構造の改良を考案し、夏・秋蚕種製造をさらに容易で実用的にした蚕種改良家。同村の藤岡甚三郎の考案した究理法をさらに研究、風穴の改良を繰り返し、明治35年(1902)風穴に保存した蚕種越年卵を夏秋卵とする究理法の実用化に成功、この方法を全国各地に広め農商務大臣から表彰された。	頌徳碑
16	上島 貞巖	嘉永5	(1852)	明治34	(1901)	(梓川)北小倉	住職	幼い時から浄心寺に弟子入りし、廃仏毀釈にあった寺の再興に力をつくした住職。明治5年(1872)廃仏毀釈の際、主な仏像を生家に預け、自らは四賀村・和田村で修業、機のくるのを待つ。明治18年(1885)迎えられて浄心寺の再興に取り組み、力を尽くす。	浄心寺
17	三沢 力太郎	安政3	(1856)	大正4	(1925)	七日市場	教育者	中国に創設された高等師範学校への人材派遣に応じ中国へ渡り、中国文化の向上や日中親善に努めた教育者。17歳で一日市学校で教鞭をとり、教育者として世に立とうと決意し、東京高等師範学校まで進み教師となる。岐阜県、大阪府で教師を勤めていたが、中国湖北省武昌に創設された高等師範学校の校長として赴任、日本の教育の長所の採択、中国文化の向上、日中親善に努めた。帰国後、兵庫・秋田の中学校長を務めた。	
18	白木 鉄平	万延元	(1860)	昭和6	(1931)	一日市場	医師	教師としての道を歩んでいたが、40歳を過ぎてから医師を志し単身上京、医師の資格をとり故郷で開業、村・郡会議員を務めるなど多方面で活躍した医師。寺子屋を終えた後、長尾、一日市学校に勤め、正教員の資格をとった。その後、倭小学校長となり明治25年(1892)まで勤める。この頃コレラの大流行があり、医学の必要を痛感し、明治37年(1904)上京、医師の資格をとり帰郷し開業、村議会議員、校医、郡会議員、繭糸会社社長なども務める。	
19	森山 儀文治	文久3	(1863)	昭和20	(1945)	(広丘)七日市場	弁護士	困っている人の訴訟には無料で弁護、松本市会議長、県会議員、代議士などを歴任した弁護士。広岡村郷原の出身、明治11年(1878)森山家の養子。21歳の若さで弁護士となる。困っている人には、無料で弁護、仕事熱心で相談に訪れる人が後を絶たない。松本市会議長・県会議員・代議士もつとめる。県庁の移庁問題、旧制松本高等学校誘致の運動に献身的な努力をした。	
20	百瀬 亥三松	文久3	(1863)	大正12	(1923)	一日市場	自治功労者	信濃鉄道(現大糸線)松本・大町間の開通に奮闘し実現させた功労者。明治32年(1899)明盛村長となりその後県議員も務める。明治43年(1910)松本・大町間に鉄道敷設の議が起ったが反対妨害運動にあった。これを説得、翌年4月敷設認可がおりる。そこで自ら設立会社の発起人となり創業の難事業に挺身努力した。大正2年(1913)起工、同5年開通させた。また、祖父の後をついで中房温泉を経営し、日本アルプスの宣伝に寄与した。	○

No	人物	生年		没年		出身	功績・歩み・人柄等の要点		関係する場所・参考事項等
21	松岡 好一	慶応元	(1865)	大正6	(1917)	二木	志士	高い志と愛国の情熱をもって活動した海外発展の先覚者。 志をたて上京し松沢求策に出会い師弟のつながりをもつ。その後、雑誌「日本人」で大いに筆をふるう。日本の人口問題解決のために、南洋移民方策をたて南洋航海に出てシドニーへ上陸、領事館設置運動を起こし実現させる。その後、中国に渡り旅館日本館を経営、日中友好に寄与した。	○
22	塚田 豊太郎	慶応元	(1865)	明治32	(1899)	北小倉	自治功労者	水に恵まれない小倉村に冷沢からトンネルを掘って水を供給する大計画をたてたが実現せず亡くなった村長。 役場書記、村会議員、収入役などの要職を務め、明治30年(1897)村長に就任する。水資源に恵まれない村に水を確保して村を豊かに出来ないかと考え、冷沢から1,800mのトンネルを掘り、その水を黒沢川へ取り入れる計画をたて、実地調査、村議会での検討、専門技師の指導を仰ぐなどをした。しかし、この計画の途中で明治32年(1899)、雄図空しく35歳の若さで急逝した。	
23	帯刀 近二郎	慶応2	(1866)	昭和11	(1936)	野沢	実業家	温銀行を設立し、商売の代金決済を便利にした実業家。 蚕種などの生産で経済が活性化してくるとその代金の決済が大変になった。そこで明治29年(1896)自らが頭取となって自宅を改造して温銀行を設立した。蚕種の郵送については農産物と同様安く送れるように奔走し実現するなど喜ばれた。その後、利用者も増し堅実な歩みであったが、昭和初期の経済恐慌で物価が暴落、貸付金が預金の4倍にもなり遂に昭和7年(1932)解散した。	
24	白沢 保美	明治元	(1868)	昭和22	(1947)	一日市場	林業功労者	森林植物学の研究・調査のために外国へ出かけ、その成果を国内の林業発展のためにつくした功労者。 大学卒業後、明治35年(1902)フランス・ドイツ・スイスへ留学、さらには欧米・アジアの国々に出かけ林業の調査等を行った。その成果をもとに林業試験場の開設など林業発展のために尽力した。明治41年(1908)温明学校開校記念として外国から苗木を持ってきて植えたヒマラヤ杉とユリノ木は、今なお大木となって茂っている。	ユリノ木・ヒマラヤ杉 詩碑 ○
25	降幡 数太郎	明治2	(1869)	昭和16	(1941)	南小倉	自治功労者	小倉官林開墾推進を中心となって進め、簡易水道設置、黒沢川架橋などの成果もあげた小倉村長。 大正8年(1919)村長に就任し小倉官林約600町歩開墾の大事業に着手、各種の事業計画・規約制定・予算運営等その中心になって尽力する。昭和6年(1931)ほぼ開墾が完了する。この間、大正11年(1922)小倉開墾地の簡易水道工事着手し全戸給水、昭和3年(1928)黒沢川の2箇所上架橋工事完成させる。	○
26	岡村 千馬太	明治8	(1875)	昭和11	(1936)	中萱	教育者	教師のあるべき姿として師道の確立を提唱し気魄に満ちた教育を実践し、教育界に大きな影響力を残した教育者。 明治30年(1897)師範学校を卒業、東穂高小学校を初任校とし、東信・南信の学校を歴任、明治44年(1911)山形小学校長時代には「東西南北会」の主唱者となり、天下の名士を招いて講演会を開き、教育のあり方を談じ、師道の確立を提唱した。大正13年(1924)には会員選挙による初代南安曇教育部会長となる。	岡村千馬太碑 ○

No	人物	生年		没年		出身	功績・歩み・人柄等の要点		関係する場所・参考事項等
27	二木 柄伍	明治9	(1876)	昭和23	(1948)	(一日市場)上長尾	自治功労者	土木技師として敏腕をふるい多くの学校・旧松本市役所などの設計管理を手がけ、温村長として幾多の公共事業で業績を残した村長。 日露戦争に従軍、帰国後松本市役所の土木課長として深志公園、市役所庁舎の設計管理をした。また、信濃鉄道敷設には技師として活躍した。昭和4年(1929)温村長に就任、村内の道路・河川の改修を手がけた。昭和14年(1939)県会に当選する。	○
28	三村 惣平	明治10	(1877)	昭和22	(1947)	下長尾	自治功労者	県会議員を長く務め、梓川左岸改良工事では責任者として工事を完成させたり養蚕業の振興に尽力した功労者。 松本中学卒業後、温明学校で教鞭をとるが、推されて村の役職を多く務める。大正13年(1924)梓川左岸改良工事の責任者として工事を完成させ感謝される。また養蚕業の振興に尽力する。県会議員を10年以上連続の功績により表彰される。	○
29	野本 萱斉	明治14	(1881)	昭和10	(1935)	中萱	画家	南宋画の真髄を求める一方、詩文や和歌を愛し和歌集や漢詩集などを残している画家。 幼少の頃より絵が好きで藤森桂谷に漢籍と南宋画を学んだ。さらに南宗画の修業のため山ノ内町や京都の巨匠を尋ね研鑽をつむ。その後、富山・福井方面を遊歴し後援画会に臨んだり、詩作を続けた。晩年郷里に帰り、地元有志による後援画会等の求めに応じ、幾多の作品を残した。	
30	小松 脩	明治16	(1883)	昭和28	(1952)	中萱	自治功労者	大正末期から昭和初期、昭和の戦前戦後の20年余、数々の施策を実践し、村の振興に寄与した明盛村長。 村会議員の後、大正13年(1924)村長に挙げられ、昭和2年(1927)の温明学校火災の復興に全力を注いだ。昭和8年(1933)～21年(1946)引き続いて村長をつとめ、戦争が激しくなるなか国民保険組合の設立、役場庁舎の移転、食糧増産、疎開児童の受け入れなど先頭にたって実践し村民の支持を得た。	
31	二木 保幾	明治25	(1892)	昭和9	(1934)	一日市場	経済学者	学究の志に燃え、哲学的な理論経済学の確立に努め、学界の重鎮といわれた経済学者。 大正3年(1914)早稲田大学を卒業、新聞記者となったが専攻の経済学をさらに究めようと母校の研究室で研鑽を積んだ。同8年(1919)米・独・仏へ留学、帰国後講師、教授、経済学教務主任となる。学者としてばかりでなく、教育者としても得がたい人物であったといわれる。	○
32	務台 理作	明治23	(1890)	昭和49	(1974)	野沢	哲学者	西田哲学の一翼を担い戦後日本の思想界で指導的役割を果たした哲学者。 大正4年(1915)25歳、京都大学哲学科へ入学し西田幾太郎に師事、卒業後、第三高等学校、大谷大学などで教鞭をとる。同15年(1926)独仏留学、昭和7年(1932)東京文理科大学教授となる。戦後は同21年(1946)教育刷新委員、同25年第三ビューマニズムを提唱、新安保条約反対など高い見識を持って行動する。この間、信州各地で講演を精力的に行う。	務台文庫(三郷小)

No	人物	生年		没年		出身	功績・歩み・人柄等の要点		関係する場所・参考事項等
33	松岡 弘	明治23	(1890)	昭和58	(1983)	下長尾	教育者	長きにわたり信濃教育会長をつとめ、信州教育の発展に功績を残した教師。 敗戦直後の昭和21年(1946)国家主義教育を推進してきた責任をとり多くの校長を退職させるとともに自らも退職、以後信濃教育会の発展に尽力する。昭和31年(1956)～53年まで会長をつとめる。その間、昭和51年(1976)日本連合教育会長もつとめる。岡村千馬太の師道の確立の精神を受け継ぎ信州教育に多くの問題を提唱する。熱心なキリスト教徒であった。	
34	植原 悦二郎	明治10	(1877)	昭和37	(1962)	中萱	政治家	民主主義の顕現と議会政治の確立に心血を注ぎ、権力に屈せず節操を堅持した高潔な政治家。 明治32年(1899)22歳で渡米、さらに渡英、ロンドン大学で学位を得て帰国、明治・立教大学等で教鞭をとる。大正6年(1917)犬養木堂の勧めによって政界進出、以来衆議院議員に13回当選、34年10か月議員を務める。その間、国務・内務大臣、衆議院副議長、予算・外務委員長等々を歴任する。多忙激務のうちに寸暇を割いて著した著書二十数冊がある。	貞享義民記念館 ○
35	白木 正博	明治18	(1885)	昭和35	(1960)	一日市場	医師	産婦人科学界の多方面にわたる研究成果を発表し、その発展に大きく寄与した医師。 明治44年(1911)東京帝国大学卒業と同時に同校の産婦人科教室に入り、以後三十余年、学術進展のために没頭し、産婦人科学界の最高峰に活躍した。発表した学術論文250編、著書30余編に及ぶ。昭和21年(1946)年退職、郷里で過ごす。	○

次ぎの世には蜂の一つに身を変へて
我は飛ぶらむふる里の野に
ふる里の野に
は美しきふる里の野に

生家の甥にあたる

務台増美氏のために揮毫した句

増美君におくる

昭和四十年初春 理

嶺と雲のはなれゆ遠き夕空にむかひ立ちたり淋しきわれは
夏ひとりしずもりくらすたのしさを誰にいはまし朝顔の花

すがれ蜂

松が根のにほひする野にひとりありてすがれの蜂にもの言うわれは
雨ふればふさきひさしかけてやりぬ庭のかたつのすがれのむれに
五月晴れ女ますがれの澄む翅音耳にきこえてうれしかりけり
人よりも蜂に親しむこのさがはいつできにけむふるさと遠く
年かけて夢にまで見しすがれ蜂庭に巣くひぬ夢かとぞ思ふ
柿若葉透きて明るさわが庭にことし女まのすがれ蜂来ぬ

鍋冠山

またここに再び来えぬ思いして瞳定めぬ鍋冠山

朝な夕なこの山見つつ何ごとを思い来つるぞふる里人は

亡兄を憶ふ

病む兄と一夜汲まむと酒の瓶かかえてゆきぬ城下の道を
兄もわれも生れし家の宵ふかく無理と思ひつつ語りしものを
こぼろぎのなく夜と思ひ病む兄とかたみに語りとはに別れぬ
俳句をば日に日によりて春秋をよみつぎて兄は一生を了えぬ

妻病む

病む妻をあはれと思ふどわが心とがるがかなし夕ぐれどきに
われものみ妻ものむなる睡眠薬しだいに殖えて秋も暮れたり

妻病院より帰る

妻は帰りすがれも来なりとにかくに晩春の日は庭に光れる

残薬

亡き妻のみし残薬火に焚けばかそけき風に涙あふるる

温明小学校校歌

作曲 信時 潔

昭和十一年二月十日制定

一 高根の雪はふかけれど
里へは花の春がすみ
のぞみはをどるわが友よ
学びの窓につどわなん

二 初夏くれば一面の
青葉若葉の安曇野や
あふれてそそぐ日光に
きたえきたへんわがからだ

三 信濃の秋は早くして
高根に白く雪ふれば
心もすみてひとすぢの
学びの路をわれはゆく

四 蛍の光窓の雪
八年の月日すぎゆけば
われ等温明の健男児
もろ手も高く世に立たん

三郷小学校
三郷中学校 校歌

作曲 高木 東 六

昭和三十年三月十二日制定

一 春は来りぬ北アルプスの
み山の雪は深けれど
里べに咲くや樹々の花
人の希望も開けたり
いざや三郷のこの学び舎に
しらべも高くうたいなん

二 信濃の秋はおとずれ早く
日に日にすむや空の色
高根に白く雪ふれば
野べのみのりも身にしみぬ
いざや三郷のこの学び舎に
心をこめて学びなん

三 三郷の里は安曇のひろ野
自然の幸のよるところ
西の秀す嶺山河も
いのちとおりにて澄む里ぞ
いざやわれらもこの安曇野の
いのちをうけて共に立ちなん

豊科中学校校歌

作曲 松本 民之助

昭和三十五年十一月十五日制定

一 アルプスの高根の雪は
しろがねと輝きながら
安曇野に春はたけなわ
白壁とれんげの花田
校庭の芝も 萌え出て
若き日の 胸はふくらむ

二 もり上る樺の若葉
安曇野は光のひろ野
安曇野のま中にありて
かがやくや豊科町は
陽光の あふるるうけて
きたえなん われらのからだ

三 安曇野に秋風わたり
見はるかす山も澄みたり
楓の木々村々ゆけば
いちめんのみのりの秋ぞ
いざともに 心ひきしめ
いそしまん まなびのみちを

四 ともどもに心をあわせ
明日の日の希望を立てよ
若き日の夢を守りて
いつの日も明るくあらん
美しき 芝生の庭の
母校 母校 豊科中学校

登載した校歌以外に、理作先生が
校歌を作詞された学校

・倭学校 小学校並びに中学校

昭和二十七年三月十四日制定

・梓川中学校

昭和三十年三月十三日制定

・西穂高小学校

昭和三十三年三月十五日制定

穂高北小学校校歌

作曲 飯沼 信義

昭和四十六年三月三日制定

一 西に立つ有明山や
裾めぐる中房川と
松原とみのる稲田と
よく人のはたらく里に
われらみな生命をうけて
ここにありこの学び舎に

二 名にし負う穂高の里は
安曇野のはじめの里ぞ
この里の生命をうけて
われらいまここに集えり
穂高なるこの学び舎の
栄えこそわれらのちかい